

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：34314

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05572・19K20782

研究課題名(和文)カナガナハリ大塔を中心とするインド仏教史的研究

研究課題名(英文)A Study of the Indian Buddhist History Focusing on the Great Stupa at Kanaganahalli

研究代表者

中西 麻一子 (NAKANISHI, Maiko)

佛教大学・総合研究所・特別研究員

研究者番号：70823623

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：2年間の研究期間中に、インド政府考古局の調査許可証のもと、2回のカナガナハリ大塔の実地調査と、8カ所の博物館およびパールフット遺跡での資料収集を行った。カナガナハリ大塔では、未報告の出土品と碑文を撮影し、それらの配置図を記録して、基礎史料の更新を行うことができた。これらの新資料を用いて、カナガナハリ大塔の仏伝図研究を行った。研究成果は、(1)『義足経』における因縁物語第10経と第14経に説かれる因縁物語とその図像表現、(2)カナガナハリ大塔におけるスジャータの乳糜供養説図について、(3)南インドにおける成道図の図像表現「満瓶をてがかりとして」と題した3つの論文として発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は、紀元前1世紀～紀元後3世紀の南インドへの仏教伝播の様相を、同時代資料の提供が可能なカナガナハリ大塔の考古学的出土品から読み解くことができた点にある。文献と図像の両資料の伝承過程上に、カナガナハリ大塔の仏伝図を位置付けて分析することで、南インドにおける仏教の特色を具体的に提示した。これら新出の仏伝図を古代インドにおける希少な無仏期の作例に加え、インド仏教史を考究する上で新たな視点と研究資料を提供している。

研究成果の概要(英文)：In these two years of the grant period, I conducted a couple of field investigations at Kanaganahalli as well as at another archeological site, Bharhut, and eight museums in India. On each site, I collected digital images of the early Buddhist sculptures. Especially at the site of Kanaganahalli, I was able to update the fundamental materials which are as yet unreported by taking their photographs and recording their existing conditions. Based on these newly discovered sculptures, I have examined iconographical representations of the Buddha's life story. As the result of this study, I have published three papers, namely, (1) "On the Story of the "Yizu-jing": Focusing on Stories and Its Iconographic Representations Depicted in the Tenth and the Fourteenth Chapters," (2) "A Study on the Reliefs of "Sujata's Offering" from Kanaganahalli," and (3) "An Iconographic Study of the Enlightenment of the Buddha in South India: With Special Reference to the Depiction of Purnakumbha."

研究分野：人文学

キーワード：インド仏教史 インド仏教 南インド カナガナハリ 仏教美術史 仏教図像学 仏伝図 仏伝

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

1990年代よりダム建設のための試験発掘が実施されてきた南インド・カルナータカ州から、カナガナハリ大塔と名付けられた世界遺産のサーンチー第1塔を凌ぐ規模の仏教遺跡が発見された。カナガナハリ大塔の造営時期は、紀元前1世紀から紀元後3世紀である。この時代は、まさにインド全土に仏教が流布するなかで大乗仏教が興起し、仏像が出現したインド仏教史の大転換期にあたる。ところがこの重要性に比してこれまでの研究では、この時代の仏教僧団がインドの各地域においてどのように興隆していたのかについては、十分に検討されてこなかった。その要因は、年代特定の可能な一次資料に乏しいという史料的限界によるところが大きい。そこで、この状況を打開すべく、同時代資料の提供が可能なカナガナハリ大塔を研究対象とする本研究を通して、インド仏教史を考究する上での新視点を提供できるのではないかと考えるに至った。

研究代表者は、インド政府考古局による発掘報告書が2013年に公刊される以前からカナガナハリ大塔の実地調査を実施し、出土したレリーフの解明に取り組んでいる。これまでの研究を通してカナガナハリ大塔の仏伝図には、サーンチー第1塔塔門のレリーフ表現が色濃く継承されており、文献資料ではそれらの表現が、パーリ語で伝承される南方上座部所伝の初期経典や仏伝文学の記述に合致することが判明した。この研究成果に基づいて中インド・サーンチー大塔に伝播した仏教が、南インド・カナガナハリ大塔を通して南方上座部の活動拠点であったスリランカへと南下する道筋を立てることができるのではないかとという仮説を立てた。しかし現段階では、カナガナハリ大塔から出土した全てのレリーフの解明と、資料不足のために同時代に興隆していた他の仏教遺跡との比較が十分に行われていない。よって、本申請課題では、これまで積み上げてきた研究の不十分な点を補い、検証を重ねることを目指した。

2. 研究の目的

本申請課題は、これまで史料的限界により未開拓であった紀元前1世紀から紀元後3世紀の南インドにおける仏教僧団の実態に迫るため、同時代に造営されたカナガナハリ大塔から出土した考古学的出土品の分析および解明を目的とする。仏伝や本生譚を描いたレリーフに描写される図像表現を文献資料に基づいて丹念に分析し、仏教がその誕生地である東インドから南インドへと伝播した様相を具体的に明らかにする。

3. 研究の方法

カナガナハリ大塔の考古学的出土品は、本申請課題に先立って実施した研究代表者の実地調査を踏まえると、発掘報告書に未収録のものを含め相当な数が出土している。それらのうち仏伝や本生譚等の仏教説話を描いたレリーフは、紀元前1世紀から紀元後2世紀頃に制作されたものであり、それらすべてがブッダの姿を直接描写しない無仏期の希少な作例である。その他にも100点以上にのぼるレリーフと、300点以上の碑文が発見されている。

現在は、このようなカナガナハリ大塔の全貌を解き明かすための基礎史料がようやく出そろった段階にあるが、今もなおインド政府考古局による発掘・復元作業が続いているため、継続的な出土品の調査や記録が不可欠である。そこで本申請課題に対して、次の3つのアプローチを同時に進めた。

(1) 実地調査による実測と資料収集

カナガナハリ大塔の実地調査を年度ごとに行った。研究代表者が2009年に行った実地記録と比較して、その推移を記録する。資料不足を補うため、カナガナハリ大塔と同時代の仏教遺跡から出土した作例の収集や、博物館での実見調査を実施した。必要に応じて、関連書籍や雑誌を購入し、研究資料の収集にも努めた。

(2) 新出した出土品の資料整理ならびに基礎史料の更新

カナガナハリ大塔の実地調査によって得られた実測・配置記録の資料整理を行った。新出の出土品や碑文の画像データは、編集ソフト（フォトショップ）を用いて補正し、カタログ化した。大塔を構成する各部材ごとの実測及び配置記録は、図面作成ソフト（CAD）に取り込み、配置図を作成した。これらの作業過程を経て、基礎史料の更新を図った。

(3) 図像表現の文献資料への比定

(1)と(2)で得られた研究資料を活用し、カナガナハリ大塔より新出した仏伝図の図像表現を解明した。具体的には、同じ主題が記される文献資料（サンスクリット語・パーリ語・漢文の資料）と図像資料（中インド・西インド・南インド・ガンダーラ地域の作例）を収集し、比較検討することで、レリーフの図像表現を地理的・時代的の両面から位置付けた。それによって、カナガナハリ大塔の受容した仏教の特徴を明らかにした。

4. 研究成果

(1) カナガナハリ大塔の調査および関連する図像資料の収集

- ①2年間の研究期間中に、インド政府考古局の調査・撮影許可証のもとカナガナハリ大塔の実地調査を2回にわたって実施し、カナガナハリ大塔を構成する各部材（上段・下段レリーフ石板・動物装飾帯、仏座像、アーヤカ柱、仏足石板、コーニス（軒）など）の実測と配置場所を記録することができた。調査中に、未公開の断片や碑文が多量に見つかったため、それらの写真撮影を同時に行った。他方で、出土品の半数以上が2009年に作成した配置図の場所から移動していたことも判明し、移動中に紛失したと考えられる複数の断片を特定した。このような事例と直面したことで、現在も発掘・復元作業中のカナガナハリ大塔を定期的に調査することは、失われる可能性のある文化財を記録するという点においても重要であることを強く実感した。
- ②博物館では、ニューデリー国立博物館、コルカタ・インド博物館、ムンバイ・チャトラパティ・シバジ・マハーラージ博物館、テランガーナ州立博物館、グルバルガ博物館、カリムナガル博物館、チェンナイ州立博物館、トゥルシ博物館での調査を行った。カナガナハリ大塔と関連する紀元前2世紀～紀元後3世紀に造営された仏教遺跡出土の作例を中心に実見し、撮影を行い、図像資料の充実に努めた。特に、グルバルガ博物館には、カナガナハリ大塔の出土品が移設されており、それら展示品の多くが未紹介のものであるため、十分な時間をとって記録を取った。
- ③その他の遺跡では、現存最古の仏教遺跡であるバールフット遺跡（紀元前2世紀）とその周辺の調査を実施した。近隣に点在するバールフット村、バタヤ村、アカハ村、マイハナ村、マタラ村、バタマラ村、パタオラ村、ケムラガル村、バラタラオ村の祠堂もあわせて調査し、バールフット遺跡から移設された彫刻の有無や設置状況を記録に留めた。
本研究において整備した図像資料や配置図は、研究資料として極めて貴重であり、今後のインド仏教史研究および仏教美術史研究に活用できるものである。

(2) カナガナハリ大塔より新出した仏伝図に関する研究

上記(1)の成果を踏まえ、整備した画像資料の細部を分析し、カナガナハリ大塔から新出した仏伝図を考察した。東インドより発生した仏教が南インドへ伝播する過程を、図像表現の変容に即して把握することで、南インドにおける仏教の特色を明らかにした。研究成果として次の3つの論文を発表した。

- ①『義足経』における因縁物語—第10経と第14経に説かれる因縁物語とその図像表現—
（『義足経』研究の視座 附・訓読、加治洋一・漢訳仏典研究会編、自照社出版、2019）では、『義足経』第10経「異学角飛経」と第14経「蓮華色比丘尼経」に説かれる両因縁物語（舎衛城の大神変と三十三天降下）を取り上げて、その対応経と図像資料の変遷に沿って両者の位置づけを試みた。カナガナハリ大塔からも出土している舎衛城の神変図と三十三天降下図には、中インドからガンダーラ地域へと北上する経路と、南インドへと南下する経路上に位置する仏塔から出土したレリーフに大きな表現上の相違があり、『義足経』の因縁物語は、ガンダーラ地域へと北上する経路上の仏塔に保存されたレリーフとの類似点があることを指摘した。この考察結果により、『義足経』に説かれる因縁物語に北伝の要素が含まれていることを明らかにした。
- ②「カナガナハリ大塔におけるスジャーターの乳糜供養図について」（『アジア仏教美術論集 南アジア I（マウリヤ朝～グプタ朝）』、宮治昭・福山泰子編、2020）では、まず乳糜供養話を伝承する諸文献を初期経典、律蔵、仏伝文学に区分して内容を整理した。個別表現の対照表を作成し、内容が改変された経緯を論じた。そのうえで、乳糜供養図が如何なる説話内容に基づいて描かれたのかを、インド古代初期美術とガンダーラ美術の作例を挙げて検討した。以上の文献資料と図像資料の両考察を踏まえて、カナガナハリ大塔から新出した乳糜供養図の位置付けを行った。乳糜供養図が描かれるレリーフ石板に「スジャーター」という村娘の名が刻まれていたため、仏伝文学の段階になって初めて登場するスジャーターのエピソードが、紀元後2世紀には南インドまで伝播していたことを示す初作例であること、仏伝文学の作成と仏塔の周囲で仏伝場面の制作が行なわれることに共通の基盤があることを示す重要な作例であることを指摘した。
- ③「南インドにおける成道図の図像表現—満瓶をてがかりとして—」（『真宗文化』29、2020）では、南インドに特有の成道図を取り上げ、その図像表現を文献資料に基づいて解明した。南インドの成道図は、主にカナガナハリ大塔、アマラーヴァティー大塔、チャンダヴァラム大塔などから出土しており、いずれの図像表現もブッダの存在を暗示する空の椅子に向けて満瓶を掲げたり、満瓶の水を注ぐ神々が描かれている。この満瓶の用途を文献資料の用例から検討すると、『ディーバヴァンサ』や『ニダーナカター』などのスリランカの上座部が所伝する諸文献において、古代インドの慣習に倣い都や道路を清浄にする際に、満瓶が設置されることが確認された。このような満瓶の用途に基づけば、成道図に満瓶が描かれることには、空の椅子を満瓶の水によって浄め、ブッダに相応しい清浄な場所であること示すためであると解釈することができる。

(3) 今後の研究への展望

本申請課題を遂行し、南インドにおける仏教の一側面を考古学的出土品から読み解くことができたことは、大きな研究成果であった。しかしながら、カナガナハリ大塔の膨大な出土品を分析することは、文献資料との比較検討を含めた継続的な研究の遂行が不可欠であり、さらなる検証を積み上げることで、南インドに伝播した仏教の実態をより正確に理解することができる。今後の研究への展望としては、仏伝図を分析する過程で気が付いた南インドに特有の表現や仏教外の要素に着目し、他の南インドの仏教遺跡から出土した類例との比較や、仏教文献外の文献資料への範囲を広げた用例調査を行い、仏教が南インドの文化基盤のなかでどのように受容されたのかを考察する必要があると考え、このような見地からの研究を構想している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中西麻一子	4. 巻 29
2. 論文標題 南インドにおける成道図の図像表現 満瓶をてがかりとして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 真宗文化	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中西麻一子
2. 発表標題 南インドにおける成道図の図像表現 満瓶をてがかりとして
3. 学会等名 真宗文化研究所研究発表例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 加治洋一、漢訳仏典研究会（編）、中西麻一子（分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 自照社出版	5. 総ページ数 232（担当ページ pp. 1-7, pp. 23-38）
3. 書名 『『義足経』研究の視座 附・訓読』（内、中西麻一子担当分「『義足経』解題」、「『義足経』における因縁物語 第10経と第14経に説かれる因縁物語とその図像表現」）	

1. 著者名 宮治昭、福山泰子（編）、中西麻一子（分担執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 644（担当ページ pp. 291-322）
3. 書名 『アジア仏教美術論集 南アジア（マウリヤ朝～グプタ朝）』（内、中西麻一子担当分「カナガナハリ大塔におけるスジャーターの乳糜供養図について」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----